



## 落人の村へ

「今日は客の集まりが悪いからトラックは出るかどうか分からぬぞ。どうじゃ、わしらといつしょに1台貸し切りにせぬか」。

と、いった意味のことを、小柄な爺さんがひどく訛った北京語で話しかけてきた。ここはタイの田舎町であるにもかかわらず、中国語は通じてあたりまえ、と爺さんは思っているふうだ。私がタイ最北端の街・メーサイから南に20キロほど下ったメーチャンで、中国国民党軍によって拓かれたメーサローンという街へ行く乗り合いトラックが出るのを待っている時のことだった。

「あなたとわしが100バーツずつ、こいつは貧乏だから50バーツでよいかの」

と、連れの爺さんを指差す。なんだか損な気もしたが誘いに乗ることにした。

トラックは意外なほどきれいに舗装された坂道を蛇行しながら登って行く。途中の村で

「貸し切り」にしたはずのトラックにアカ族の婆さんが二人乗り込んで来た。口元をピンロウの汁で真っ赤にした婆さんたちは、何がおかしかったのか私の方を見てケラケラと少女の様に笑った後で、どこから来なさった」と北京語で聞いて来た。

さまざまな少数民族が暮らすこの地域では北京語が標準語のような役割を果たしているようだ。どうりで先の爺さんがなんの躊躇もなく私に北京語を使ったわけである。

1時間ほどでメーサローンに到着。標高1300メートルの雨上がりの高原は麓の暑さが嘘のように肌寒い。600、700戸の小さな家々が山の斜面にへばりつく様に広がり、その周りに少数民族の村々がない点している。

メーサローンの街の住民の大部分は雲南省出身の中国人である。共産党軍に敗れた国民党雲南方面軍は雲南省からヒルマ(現ミャンマー)に逃れ失地回復の機会をうかがったが、

# 将軍の茶

ゴールデン・トライアングル

ビルマの共産化で1961年に再び拠点を失うと、軍の一部は台湾に移住、一部はメーサロンに移動する。ソプルアクのゴールデン・トライアングルは地図上のシンボルに過ぎず、国民党軍が村を築いたこのあたりがタイのケシ栽培の中心であった。麻薬王と呼ばれたクンサ将軍も80年代にタイ政府軍に追われてビルマに拠点を移すまでは、メーサロンから北東に20キロほどのパンヒンテックを本拠地としていた。

国民党軍が解散し、ケシ畑が一掃された今日のメーサロンは、春には桜の名所として、夏には避暑地としてタイ人の間で人気が出始めている。

回教寺院のアザンがまだ夜明け前の街に響き渡り、白い帽子をかぶった回教徒たちが朝の礼拝に急ぐ。タイ人の大多数は仏教徒であり、マレーシアに近い南タイをのぞけば回教徒は少数派といえるが、メーサロンには回教徒が多い。これ



【右上】春茶の収穫風景  
【左下】茶を摘む者の大多数は少数民族の女性

は雲南省には回教を信じる少数民族・回族が多く暮らし、国民党軍の兵士や家族のなかにも回族が少なくなかったからである。

早起きは回教徒だけではない。街に一つしか無い市場にも暗いうちから人々が集まってくる。売る側にも買う側にも、アカ族、リス族などの少数民族が多く混じっている。白菜やトマトなど朝露に光った高原野菜、果物、そして、いたいどこから運んで来たのか生きた魚も売られていた。

市場の外には軽食を出す屋台が並び、粽、赤米で炊いたおこわなど、どれも雲南風で、汁そばに使われた麺はタイではバンコクの中華街ですらほとんど見かけることのない麺條

と呼ばれるものだった。

街はずれにある学校の校庭では、朝礼に学生数百人が整列していた。街の規模からすると学生の数がずいぶん多いから、近郊の村々から母子供たちが通って来ているのかもかもしれない。

下校途中に木陰でひと休みする女学生たちもみな流暢な北京語を話していたが、彼女たちの顔立ちは各々大きく異なっていた。それは個人差というより民族的な違いといえるものだ。国民党軍に従軍した者は当然のことながら男性が圧倒的多数を占めたため、ビルマ在留中、そしてタイに移って来てからも、現地の女性、なかでも少数民族の女性と結婚

## 特集

南信之【文・写真】

text & photo : Nobuyuki Minami



する者が少なくなかった。それでメーサローンには中緬（ミャンマー、中泰タイ）混血の子供たちが多いのである。

女学生の一人に、「皆さん中国人ですか」と訪ねると、皆、「中国人ですよ」と答えが返って来た。彼女は中国国籍であるとか中華文化を継承する者という意味で、「中国人」と答えたのではなく、単純に「お父さんがお祖父さんが中華系」といった意味でいったのだと思う。

## 将軍の茶

街に一つだけある銀行の向いに、『段將軍茶店』なるお茶屋がある。段希文將軍はビルマ脱出から1980年にメーサローンに客死するまで、国民党93師団（通称）の最高司令官を勤めた人物である。將軍は広州の黄埔軍校に並び賞された名門軍校・雲南陸軍講武堂に学んだ。同窓には新中国の元老・朱徳・葉劍英など、そうそうたるメンバーが名を連ねる。その後起こった一連の出来事を考えるとなんと皮肉な

話である。

將軍は二男二女をもうけたが、現在メーサローンに残るのは息子さん一人だけで、茶店と茶園はその息子夫婦の家族によって営まれている。93師団の軍人のなかには雲南のお茶農家出身者が数多くいたので、茶の栽培はメーサローン入植直後から行われていたが、当時栽培されたお茶は主に自給用で質も悪く、生産量も少なかったという。茶の栽培が本格化したのは師団解散後のこと。ケシの代わりにお茶が植えられたのである。

現在、作っているお茶で一番多いのは烏龍茶だが、店で売られる商品の大部分は緑茶。これはタイ人が緑茶を好むからだそう、烏龍茶は主に輸出用だそうだ。近年になって台湾種の軟枝烏龍茶を用いて高級茶も作られるようになった。現在、メーサローン周辺には大小10余りの茶園があり、その内の一つは台湾人の経営である。

將軍の孫にあたる段江氏が軟枝烏龍茶をいれてくれた。



【右上】アカ族の村の茅葺き家屋  
【右下】バナナの葉を日傘代わりに登校



茶器に湯を注いだ瞬間に蘭の香りが立ち上る。軽醜酵、軽焙煎で仕上げられたお茶の水色は澄んだ緑黄色。のどこしはこの上もなくまるやかで、飲んだ後もほのかな甘みが長く口に残る。『將軍茶』の名に恥じ

ない銘茶であった。

段將軍茶屋の裏手の小山にはリゾート風のバンガローが数十軒並んでいるが、これも段將軍の子孫たちにより経営されている。バンガローを過

ぎてさらに山道を登ったところ  
に段將軍の墓がある。墓と  
言うより靈廟と呼んだ方がよ  
さそうな立派なものだ。

墓の掃除をしていた軍装の  
老人と話をした。老人の名は  
黄家福。15歳の時に雲南で徴  
兵され、何十年も將軍の護衛  
を勤めたそうで、黄老人にとっ  
て、將軍は父親のような存在  
だったという。

墓ができた当初は老兵5人  
が交代で墓守りをしていた  
が、一人、また一人と離れ、今  
はこの黄老人独りだけになっ

てしまった。台湾当局から支給  
されていた補助金も李登輝総  
統時代に打ち切られ、現在、墓  
の維持費や老人の生活費は墓  
参に訪れる者からの寄付だけ  
でまかなっているそうだ。

「故郷に戻りたくはないか」と問うと、老人は「帰りたいとは思わんね」とあっさり答えた。故郷で暮らした年月の数倍の時間をここで過ごしたのだからそれは無理もない。私と別れの挨拶を交すと、老人は墓の傍の小型テントに背を丸めてもぐり込んだ。



將軍の墓からいったん段將軍茶店に戻り、店の西側の坂道を半時間ほど上ると小山の頂上に建設中の寺に行き着く。寺からは山肌に張り付くように広がるメーサロンの街と、街を囲むように広がる茶畑を一望のもとに見渡すことができた。

なぎの中で完全に静止する幾千幾万の茶樹が午後の陽光を受けて輝く様は、さながら緑の絵の具だけで描かれた油絵のようである。中国語でメーサロンは「美斯樂」と書く

がまさに字にふさわしい美しいのどかな光景だ。

メーサロンを起つ日、朝一番のメーチャン行きの乗り合いトラックに乗った。急勾配を下るトラックから見えた段將軍の墓は東の空に登ったばかりの朝日を正面から受けていた。中国人の墓は特に風水などの事情が無い限り南向きに建てられるものだが、この墓は東を向いている。東は將軍が生涯忠誠を貫いた蒋介石の眠る台湾の方角である。

